

[別紙2]

審査の結果の要旨

氏名 緒方 泰子

本研究は、「仕事の大変さ」という表現を用いて実際に提供された訪問看護サービスの相対的価値付けを行い、時間および密度（精神労働、肉体労働）を反映した訪問看護サービスにおける労働投入量を表す変数としての「仕事の大変さ」の妥当性、「仕事の大変さ」に影響する利用者特性とその影響程度の側面から分析し、以下の結果を得ている。

1. 調査期間中に提供された訪問看護サービス 99 種類のうち、20 回以上提供された訪問看護サービスにおける「仕事の大変さ」の幾何平均値を従属変数、3 サービス属性（時間、密度：精神労働および肉体労働）の幾何平均値を独立変数として重回帰分析を行った。その結果、adjusted R^2 は 0.956、標準偏回帰係数は、精神労働 0.777**、肉体労働 0.277**、時間 0.083、定数-0.373**であり（** $P < 0.01$ ）、「仕事の大変さ」が 3 サービス属性によって説明されることが確認された。
2. 「仕事の大変さ」を従属変数、回答者個人・訪問看護サービスの種類を因子、3 サービス属性を共変量とした共分散分析を行った結果、回答者個人および訪問看護サービスの種類による影響を調整した上での、3 サービス属性による adjusted R^2 の増分は 0.424 であった。「仕事の大変さ」値は、回答者個人・訪問看護サービスの種類による影響を受けるものの、3 サービス属性による影響の方が相対的に大きいことが確認された。
3. 「仕事の大変さ」を従属変数、利用者特性を独立変数とした重回帰分析（ステップワイズ法）を提供回数 50 回以上の訪問看護サービス毎に行ったところ、選択された利用者特性による adjusted R^2 は、0.155～0.357 であり、選択された利用者特性は訪問看護サービスの種類により異なっていた。複数の訪問看護サービスに共通して、「仕事の大変さ」と関連していた利用者特性は、MDS-HC2.0 による問題領域（Client Assessment Protocols : CAPs 領域）、ADL 関連変数、認知機能・理解に関連する変数、主疾患、病状の変化を表す変数であり、これらの利用者特性は「仕事の大変さ」との関連を検討していく際

の重要な変数であると考えられた。

4. 訪問看護 21 回に研究者が同行し、訪問看護サービス 50 種類を実測し、実測値と回答値の対数変換前の値について比較したところ、両者に有意差はなく（対応のある t 検定）、相関係数は 0.959 ($P < 0.01$) であった。また、回答値による実測値の予測式は、原点近くを通り（切片 19.58（秒）、 $P = 0.295$ ）、傾き 0.984 ($P < 0.01$) の直線となり、adjusted R^2 は 0.919 であった。これらより、時間に関する訪問看護職の回答値は妥当であることが確認された。
5. 仮想患者に関する 2 回の回答値を比較した結果、1 回目と 2 回目の対数変換後の平均値の相関係数は、「仕事の大変さ」では 0.819 ($P < 0.01$)、精神労働では 0.963 ($P < 0.01$)、肉体労働では 0.949 ($P < 0.01$)、時間では 0.972 ($P < 0.01$) であり、x 軸に 1 回目の回答、y 軸に 2 回目の回答を示した散布図は原点近くを通り傾き 1 の直線近くに集中しており、2 回の回答が良く一致していることが確認された。相関係数の大きさと散布図の形状から、仮想患者に関する「仕事の大変さ」や 3 サービス属性の回答値が再現性のある値であることが確認された。
6. これらの結果より、「仕事の大変さ」が 3 サービス属性を反映し、労働投入量を表す妥当な変数となりうることが示され、特に、3 サービス属性のうち、精神労働による「仕事の大変さ」への影響が大きいことが明らかになった。また、「仕事の大変さ」に影響する利用者特性とその影響程度は、訪問看護サービスの種類により異なることが確認された。

以上、本論文は、実際に提供された訪問看護サービスにおいて、「仕事の大変さ」が各訪問看護サービスに要する時間および密度（精神労働、肉体労働）を反映した相対評価値であること、その値は利用者特性による影響を受け得ることを示した。本論文は、仮想患者ではなく実在する患者へ実際に提供された訪問看護サービスを対象とした点で独創的であり、訪問看護サービスにおいて時間と密度を反映した労働投入量の測定可能性が示された点では有用性も兼ね備えており、学位の授与に値するものであると考えられる。